九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 歐陽脩『六一詩話』文体の特色

東，英寿
鹿児島大学 ： 教授 ： 中国文学

https://doi.org/10.15017/9591

出版情報：中国文学論集. 34, pp.27-39, 2005-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

# 歐陽脩『六一詩話』文体の特色

東　　英　寿

## 一　はじめに

詩話という文学評論のジャンルが確立したのは宋代である。『歐陽文忠公集』巻128に収録される『詩話』こそが、初めて詩話と名付けられた作品であり、このジャンルは歐陽脩によって創始されたと言える。『資治通鑑』を著した司馬光は、歐陽脩の『詩話』に続けるという意味で、自己の詩話を『續詩話』と命名した。このように、歐陽脩の『詩話』は後世に大きな影響を及ぼしているのである。(なお、歐陽脩の『詩話』は、後に陸続と編纂された詩話と区別するために『六一詩話』と呼ばれることが多く、本稿でも『六一詩話』と呼ぶことにする。)

ところで、洪本健「略論歐陽脩散文的陰柔之美」においては、(1)

> 這様、歐陽脩的散文更便于実用、創作路子越走越寛。他的《六一詩話》無拘無束地品評詩歌、自由自在地談論芸術、開創了文芸批評的一種新様式。
>
> このように、歐陽脩の散文は更に実用に適しており、創作手段もますます広まった。彼の《六一詩話》は思いのままに詩歌を品評し、自由自在に芸術を論じ、文芸批評の新様式を創り出した。

と述べ、歐陽脩の散文が実用的で、それが自在に用いられ、詩話という新しいジャンルを創始するに至ったことを指摘する。

また、楊慶存「宋代散文体裁様式的開拓与創新」では、(2)

> 詩話産生于宋代古文運動極盛之時、是古文運動影響下的産物。
>
> 詩話は宋代古文運動が隆盛の時に生まれ、古文運動の影響下の産物である。

として、詩話が宋代古文復興の盛んなりし頃に生まれたことに注目する。詩話というジャンルを創始した歐陽脩は古文復興の立て役者であり、古文によっ

て『六一詩話』は執筆されている。つまり、歐陽脩の『六一詩話』に用いられた文体を分析すれば、歐陽脩の古文の特色の一端が見えてくるということになる。

そこで、本稿では、歐陽脩の『六一詩話』の文体を考察対象とし、そこから彼の古文の特色を能う限り明らかにしたいと思う。

## 二　『六一詩話』と『歸田録』

『六一詩話』は、その序に「居士退居汝陰而集以資閒談也」と記載するので、歐陽脩が汝陰に帰隠した後、「閒談に資す」という目的のために作成されたことがわかる。歐陽脩が帰隠したのは、熙寧四年（1071）七月で、翌熙寧五年（1072）七月に六十六歳で亡くなる。よって、『六一詩話』は六十五歳から編纂が開始された歐陽脩最晩年の作であると言える。

この『六一詩話』の成立を考える上で看過できない作品として『歸田録』が挙げられる。歐陽脩が『歸田録』を作成していた期間は英宗皇帝の治平年間（1063～1067）五十七歳から六十一歳頃の晩年で、更に熙寧四年の致仕以後に改訂されており、改訂と同じ時期に『六一詩話』が編纂されていることは注目すべきである。[(3)] しかも、その序には「歸田録者、朝廷之遺事、史官之所不記、與夫士大夫笑談之餘而可録者、録之以備閒居之覧也」とあるように、「閒居の覧に備ふ」という目的で書かれた逸話集であり、これは『六一詩話』の「閒談に資す」という、所謂気楽自由な態度と共通している。そのため、『六一詩話』は『歸田録』とどの様な関連にあるのかということについて、これまで以下のように見解が分かれていた。

たとえば、李偉国「歸田録佚文初探」の中では、[(4)] もともと『六一詩話』は『歸田録』の一部分ではなかったのかという疑問を提出している。それは、宋人が『六一詩話』の文章をしばしば『歸田録』として引用することから生じた疑問であった。結局、『六一詩話』を『歸田録』として引用した人は、歐陽脩に『六一詩話』が存在することを知らなかったからだとし、『六一詩話』と『歸田録』とは別ものと見なければならないと結論づける。一方、豊福健二氏は論文「「六一詩話」の成立」の中で、[(5)] 『六一詩話』の編集と『歸田録』の改訂が同じ時期に行われていたことに注目し、「その改訂に際して、原本「歸田録」の中で、ある程度まとまった種類の話題である詩話を独立させることに思い至ったのである」と記述し、更に『六一詩話』の三分の二以上は『歸田録』に含まれていたのではないかと推測する。 また、興膳宏氏は論文「宋代詩話における歐陽脩『六一詩話』の意義」において、[(6)]「こうし

て二つの書は、詩や詩人を対象とする話題において重なり合う内容を持ちながら、意識的に書き分けられているところがあるのもやはり無視することはできないだろう」と記述する。

いずれも『六一詩話』と『歸田録』との間に何らかの関連があると指摘する点では一致するものの、二書を別物として捉えるのか、『六一詩話』は『歸田録』の一部であったのか、それとも二書は意識的に書き分けられていたのか等、その見解が分かれている。

これらは、主として『六一詩話』と『歸田録』の内容の類似性、あるいは編纂時期に着目した考察であった。そこで本稿においては、これまでの研究で全く注目されていなかった視点、即ち『六一詩話』と『歸田録』の文体面に注目したい。本稿では、特に歐陽脩の文章に見られる虚詞の用いられ方を考察したい。なぜならば、歐陽脩古文の特色は、虚詞の用いられ方にあると考えるからである。たとえば、劉徳清『歐陽脩論稿』では次の様に述べる。(7)

> 文章神気、駢文在音律、散文在虚字、是有一定道理的。歐陽脩在本文中連用二十一个“也”字、它有規律地散見全篇、反復出現、加強了文章的節奏感和抒情気氛、也強化了文章詠嘆的韻味、讀起來琅琅上口。
> 文章の神髄は、駢文では音律、散文では虚字にあり、これは必ず道理のあることである。歐陽脩は本文中に二十一個の“也”字を連用するが、それは規則的に全篇に散見し、反復して出現し、文章のリズム感と抒情の雰囲気を強め、また文章に詠嘆の味わいを増して、読んでみると朗々と読めるのである。

即ち、駢文の特色は音律、そして散文（古文）の特色は虚詞にあるという見解である。歐陽脩の文章には虚詞が連用され、反復して用いられることで、文章のリズム感や抒情、詠嘆の趣を強めていると指摘する。二十一の「也」字を使用しているのは「醉翁亭記」のことで、呉孟復『唐宋古文八家概述』においては、(8)

> 歐文中、不僅《醉翁亭記》多用“也”字、《瀧岡阡表》中也連用了許多“也”字。
> 歐陽脩の文章中、《醉翁亭記》が“也”字を多用しているのみならず、《瀧岡阡表》中にも多くの“也”字を連用している。

と記述し、「醉翁亭記」だけではなく、「瀧岡阡表」に見られる「也」字の多

用にも着目する。このように、歐陽脩の文章は虚詞にその特色が表れており、従って虚詞の考察は彼の文体を知る上で、有意義な視点になると考える。

そこで、本稿では『六一詩話』と『歸田録』の虚詞の使用を比較したい。先ず、次に挙げる10の虚詞を選び、その個数を調査した。(9)

○乎……疑問・反語、感嘆を表す語気詞。
○也……認定、疑問・反語、感嘆を表す語気詞。
○焉……認定を表す語気詞。
○矣……断定を表す語気詞。
○耳……認定を表す語気詞。
○而……順接、逆接、追加などを表す連詞。
○然……転折の意味を持つ連詞。
○於……限定に用いられる介詞。比較の場合も含めた。
○蓋……限定を表す副詞。
○爾……認定を表す語気詞。

『六一詩話』、『歸田録』において、これらの虚詞の使用個数をまとめたものが表１である。

(表１)

| 作品名 | 総字数 | 乎 | 也 | 焉 | 矣 | 耳 | 而 | 然 | 於 | 蓋 | 爾 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 六一詩話 | 4070 | 5 | 51 | 0 | 16 | 7 | 43 | 5 | 43 | 9 | 2 |
| 歸 田 録 | 14110 | 10 | 152 | 1 | 25 | 0 | 168 | 29 | 108 | 24 | 18 |

『六一詩話』の総字数は4,070字、『歸田録』の総字数は14,110字であり、総字数が違うので、比較の都合上１万字あたりの出現数に換算したものが表２である。

(表２)

| 作品名 | 字数 | 乎 | 也 | 焉 | 矣 | 耳 | 而 | 然 | 於 | 蓋 | 爾 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 六一詩話 | 10000 | 12.3 | 125.3 | 0 | 39.3 | 17.2 | 105.7 | 12.3 | 105.7 | 22.1 | 4.9 |
| 歸 田 録 | 10000 | 7.1 | 107.7 | 0.7 | 17.7 | 0 | 119.1 | 20.6 | 76.5 | 17 | 12.8 |

認定や疑問・反語、感嘆を表す「也」は『六一詩話』では125.3字、『歸田録』では107.7字、疑問・反語、感嘆を表す「乎」は、『六一詩話』で12.3字、

『歸田録』で7.1字、転折を表す「然」は、『六一詩話』で12.3字、『歸田録』で20.6字、順接、逆接、追加などを表す「而」は、『六一詩話』で105.7字、『歸田録』で119.1字、これらの使用数には大きな相違はないようである。ただ、「耳」は、『六一詩話』で17.2字、『歸田録』で０字、「爾」は『六一詩話』で4.9字、『歸田録』で12.8字という相違が見られる。「耳」も「爾」も認定の意味を持つ虚詞なので、同じく認定の虚詞「焉」、認定の意味を含む「也」を併せて考えてみると、これら４つの虚詞合計の１万字あたりの出現数は、『六一詩話』では147.4字、『歸田録』では121.1字となり、その使用頻度に顕著な差異があるとは言えない。

更に、上述した10の虚詞に、次に挙げる６個の虚詞を加えて、別の角度から考察したい。

○因……上句と下句を順接で繋ぐ副詞。「因之」のように、「たよる」、「もとづく」等の意味で使用される動詞の場合も含めた。

○乃……上文をうけて下文を起こす副詞。

○則……上句と下句を順接で繋ぐ副詞。

○哉……詠嘆を表す語気詞。

○邪……疑問を表す語気詞。

○歟……疑問、反語、感嘆を表す語気詞。

16の虚詞（而、也、於、因、乃、則、然、矣、蓋、爾、乎，哉、焉、耳、邪、歟）について、『六一詩話』と『歸田録』において使用頻度の高い順に番号を付した順位表が表３である。

(表３)

| 作品名 | 而 | 也 | 於 | 因 | 乃 | 則 | 然 | 矣 | 蓋 | 爾 | 乎 | 哉 | 焉 | 耳 | 邪 | 歟 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 六一詩話 | 2 | 1 | 3 | 9 | 5 | 7.5 | 10.5 | 4 | 6 | 12 | 10.5 | 14.5 | 14.5 | 7.5 | 14.5 | 14.5 |
| 歸田録 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5.5 | 5.5 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 15 | 15 | 15 |

この順位表に基づき、ピアソンの相関係数、スピアマンの順位相関係数を求めてみたい。ピアソンの相関係数とは、『六一詩話』、『歸田録』の中で、上述した16の虚詞それぞれの使用個数を計算し、それに基づき相関関係を求めるもので、スピアマンの順位相関係数とは、『六一詩話』、『歸田録』それぞれの中で、上述した16の虚詞の使用頻度順に順位をつけ、その順位に基づいて相関関係を求めるものである。わかりやすく言えば、虚詞を個別的に分析するのではなく、作品全体の中での使用傾向としてとらえてその関係性を

求めるもので、ピアソンの相関係数、スピアマンの順位相関係数はどちらもその結果が＋１であれば使用傾向は全く同一で、－１であれば全く違うということになる。[10]

『六一詩話』と『歸田録』のスピアマンの順位相関係数を計算してみると0.7921で、一方ピアソンの相関係数は0.9534となり、＋１に相当近いことがわかる。従って、『六一詩話』と『歸田録』は同一の文体上の特色を持っていると言うことができる。更に、ピアソンの相関係数が0.9534で＋１にかなり近いことに着目すれば、『六一詩話』と『歸田録』は、虚詞使用から見ると、もともと同一の作品であった可能性も高い。前述した如く、『六一詩話』の編纂と『歸田録』の改訂作業が同時期に行われ、その内容が関連していることに基づいて、『六一詩話』は『歸田録』を献上本にする過程で、詩に関連する話題を抜き出して編纂されたものとする豊福氏の説は、[11]本稿における虚詞の使用傾向の分析結果によって大いに裏付けられるのである。つまり、虚詞の使用という文体上の特色から見ても、『六一詩話』と『歸田録』は本来一連の作であって、その母体を同じくする可能性が極めて高いと言えるのである。

## 三　『六一詩話』と『續詩話』

本章では、『六一詩話』の虚詞の用いられ方を司馬光『續詩話』のそれと比較したい。歐陽脩より十二歳若い司馬光（1019～1086）は、周知の如く『資治通鑑』の作者として名高く、宋・劉炎『邇言』では彼の文章について次のように記述する。

> 或問濮議之是非曰、…（中略）…司馬文優于歐陽、遠齊先漢、自誠實而充也。
> 或ひと濮議の是非を問ひて曰く、…（中略）…司馬の文は歐陽より優れ、遠く先漢に齊しく、自から誠實にして充つるなりと。

司馬光の文章が歐陽脩の文章より優れているかどうかはしばらく措くとして、司馬光は「先漢」の文章に範を求めており、古文を得意としていたのは言うまでもない。司馬光『續詩話』の序には、

> 詩話尚有遺者、歐陽公文章名声、雖不可及、然記事一也、故敢續書之。
> 詩話には尚ほ遺れる者有り、歐陽公の文章の名声、及ぶべからずと雖も、

然れども事を記すは一なり、故に敢て續けて之を書す。

とあり、司馬光自身が歐陽脩『詩話』(『六一詩話』)を強く意識し、その続編として『續詩話』を著そうとしていたことがはっきりと窺える。『續詩話』は全二十八条から構成されているが、[12]それは『六一詩話』全二十八条に倣ったものである。しかも、その内容について興膳宏氏は、[13]

このように、司馬光は『六一詩話』の内容を熟知した上で、歐陽脩の問題意識に合わせながら、『續詩話』の各條を書いたことがよく分かる。

と記述するように、司馬光は『續詩話』作成に当たって『六一詩話』を意識し、類似する話題を扱うことも少なくないのである。

そこで、表４にあげた16の虚詞に注目して『六一詩話』と『續詩話』での使用個数を調べた。

(表４)

| 作品名 | 総字数 | 而 | 也 | 因 | 乃 | 則 | 然 | 矣 | 蓋 | 爾 | 乎 | 哉 | 焉 | 耳 | 邪 | 故 | 歟 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 六一詩話 | 4070 | 45 | 52 | 6 | 10 | 7 | 5 | 16 | 9 | 2 | 5 | 0 | 0 | 7 | 0 | 10 | 0 |
| 續 詩 話 | 3199 | 14 | 21 | 1 | 7 | 3 | 3 | 4 | 1 | 1 | 0 | 1 | 1 | 3 | 3 | 6 | 0 |

表４を見ると、『六一詩話』は『續詩話』に比べて、概して虚詞を多用していることがわかる。『續詩話』の方で多く使用されている虚詞は「哉」、「焉」、「邪」であるが、使用個数がわずか１字から３字程度に過ぎず、大きな違いではない。『六一詩話』と『續詩話』の総字数が異なるので、比較の都合上１万字あたりの出現数に換算したのが、表５である。この表に注目すると歐陽脩の虚詞の使用上の顕著な特色が明らかになる。

(表５)

| 作品名 | 字数 | 而 | 也 | 乃 | 則 | 因 | 然 | 矣 | 蓋 | 爾 | 乎 | 哉 | 焉 | 耳 | 邪 | 故 | 歟 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 六一詩話 | 10000 | 110.6 | 127.8 | 24.6 | 17.2 | 14.7 | 12.3 | 39.3 | 22.1 | 4.9 | 12.3 | 0 | 0 | 17.2 | 0 | 24.6 | 0 |
| 續詩話 | 10000 | 43.8 | 65.6 | 21.9 | 9.4 | 3.1 | 9.4 | 12.5 | 3.1 | 3.1 | 0 | 3.1 | 3.1 | 9.4 | 9.4 | 18.8 | 0 |

高橋明郎「歐陽脩の散文文体の特色―韓愈の散文との差の成因―」[14]の中

で、歐陽脩の散文の特色は、韓愈の散文と比較して＜非明示型＞の虚詞が多いと指摘する。＜非明示型＞とは、同論文の中で「例えば、“而”は順接・逆接・並列のいずれにも用いられるので、接続形式を連詞のみで確定することはできない。一方、“則”は順接でしか働かない。今仮に前者を＜(接続形式) 非明示型＞、後者を＜明示型＞と呼ぶ」と規定されている。韓愈の文章は＜明示型＞の虚詞が多く、歐陽脩の文章では＜非明示型＞の虚詞が多いのである。＜非明示型＞の虚詞が多い歐陽脩文は、文と文の接続関係が一見するとわかりづらいため「読み手に視点のフィードバックを伴う筋の確認作業を要求する」と高橋氏は指摘している。高橋氏の考察は、比較的自由度の高いジャンルである序・記に絞り、作成年代も偏らないようにサンプリングされており、その論証は的確で説得力をもつものと言える。

表５によると、所謂＜明示型＞の「乃」「則」「因」「故」は、確かに『六一詩話』の方が多用されているが、「因」を除けば『六一詩話』と『續詩話』との間に顕著な差異があるとは言えない。顕著な差異が見いだされるのは、やはり＜非明示型＞の虚詞の使用である。たとえば、順接・逆接・並列のいずれにも用いられる「而」は、『續詩話』では43.8字、一方『六一詩話』では２倍以上の110.6字である。 読み手に視点のフィードバック作業を要求し、＜非明示型＞の虚詞と同じ性質をもつ「蓋」については、[15]『續詩話』ではわずか3.1字にすぎないが、『六一詩話』ではその７倍以上の22.1字用いられることになる。その他、断定を表す語気詞「矣」は『續詩話』では12.5字、『六一詩話』では39.3字、認定、疑問・反語、感嘆を表す語気詞「也」は、『續詩話』では65.6字、『六一詩話』では127.8字で、これらの虚詞は『六一詩話』が『續詩話』より圧倒的に多く使用されるのである。

更に、具体的に話題が類似している箇所について比較してみたい。司馬光『續詩話』で歐陽脩『六一詩話』の内容を受けて書かれた箇所がある。その書き出しは次の通りである。(文体を比較する箇所は原文のみを挙げることとする。以下同じ)

> 歐陽公云、九僧詩集已亡。元豊元年秋、余遊萬安山玉泉寺、于進士閔交如舍得之。

この部分、対応する歐陽脩『六一詩話』の記述は次の如くである。

> 國朝浮圖、以詩名於世者九人、故時有集號九僧詩、今不復傳矣。

『六一詩話』では、「以」、「於」、「故」、「矣」のように虚詞が文中に配置されている。一方、司馬光『續詩話』では「于」が用いられているものの、たとえば歐陽脩の言葉として引用する「九僧詩集已亡」の箇所は、本来『六一詩話』では「故時有集號九僧詩、今不復傳矣」と記述されており、『六一詩話』に対応させると文末に「矣」が添加されていてもおかしくない。

既に見てきたように、司馬光は歐陽脩の『詩話』に続けるとして『續詩話』と命名し、しかも全二十八条にして分量を同じくし、内容も同じ方向性のものもあり『六一詩話』を強く意識していた。にもかかわらず、『六一詩話』と『續詩話』の文体において、虚詞の用いられ方に顕著な差異があることがわかった。これは、作品の内容を踏襲するかしないかは意識的にできたけれども、文体においてはそれぞれの書き癖が無意識のうちに表出したことを物語っているのではないだろうか。ここから二人の文章の個性が窺えると考える。

歐陽脩『六一詩話』と司馬光『續詩話』を比較してみると、『六一詩話』の方が虚詞を多用し、とりわけ＜非明示型＞の虚詞を多く用いるということが明らかになった。これは、序・記というジャンルにおいて＜非明示型＞の虚詞を多用するという、歐陽脩の文章の特色とも一致しており、『六一詩話』の文体には歐陽脩古文の代表的な特色が表れていると言えよう。

## 四　『六一詩話』と『試筆』

『六一詩話』全二十八条のうち、その五条の内容が歐陽脩の『試筆』収録作と類似している。『試筆』は『歐陽文忠公集』巻130に収録されており、その作は歐陽脩が折に触れて書き付けたもので、そのことについて蘇軾は次の様に述べる。(16)

> 此数十紙、皆文忠公衝口而得、信手而成。初不加意者也。其文采字畫、皆有自然絶人之姿。信天下之奇蹟也、元祐四年九月十九日蘇軾書。
> 此の数十紙は、皆文忠公口を衝きて得、手に信せて成る。初めの意を加へざる者なり。其の文采字畫は、皆自然絶人の姿有り。信に天下の奇蹟なり、元祐四年九月十九日蘇軾書す。

『試筆』に収められている作品は、歐陽脩が口をついて出、手に任せて書いたもので、それがたまたま蘇家に保管されていたのである。制作年は明確でないが、死ぬ直前に編纂された『六一詩話』よりも、以前に作成されたも

のであったのは間違いない。つまり、『試筆』に収録された作品は、歐陽脩が初めて書きつけたもの、いわば初稿段階のもので、その幾つかが後に発展して『六一詩話』の中に取り入れられて、まとめられたのだと言えよう。

さて、『試筆』の「温庭筠厳維詩」には、

> 余嘗愛唐人詩云、鶏聲茅店月、人迹板橋霜、則天寒歳暮、風凄木落、羇旅之愁、如身履之。至其曰、野塘春水漫、花塢夕陽遅、則風酣日煦、萬物駘蕩、天人之意相與融恰、讀之便覚欣然感覚。謂此四句可以坐変寒暑。詩之為巧、猶畫工小筆爾、以此知文章與造化争巧可也。

とあり、この部分に対応する『六一詩話』の記述は次の通りである。

> 聖兪曰、作者得於心、覧者會以意、殆難指陳以言也。雖然、亦可略道其髣髴。若厳維柳塘春水漫、花塢夕陽遅、則天容時態、融和駘蕩、豈不如在目前乎。又若温庭筠鶏声茅店月、人迹板橋霜、賈島怪禽啼曠野、落日恐行人、則道路辛苦、羇旅旅思、豈不見於言外乎。

『試筆』では歐陽脩の言葉であったのが、『六一詩話』では梅聖兪の言葉に置き換わるという内容の変化が見られるが、文体面では『六一詩話』で「於」、「亦」、「若」、「又」などの虚詞が加わっているのがわかる。しかも付け加えられた文章の中に「豈不…乎」という形式の反語句二つを添加したことで、自己の感情の高まりを表し、読者に注意を向けさせようと意識している歐陽脩の意図が窺える。

更に次に挙げる部分は、『六一詩話』が内容をより深化させている。

> 『試筆』「九僧詩」
> 近世有九僧詩、極有好句、然今人家多不傳。如馬放降来地、鵰盤戦後雲。春生桂嶺外、人在海門西。今之文士未能有此句也。

> 『六一詩話』
> 國朝浮圖、以詩名於世者九人、故時有集號九僧詩、今不復傳矣。余少時聞人多稱之。其一曰、恵崇、餘八人者、忘其名字也。余亦略記其詩、有云、馬放降来地、鵰盤戦後雲。又云、春生桂嶺外、人在海門西。其佳句多類此。其集已亡、今人多不知有所謂九僧者矣。是可歎也。

『試筆』の冒頭「近世有九僧詩、極有好句、然今人家多不傳」では虚詞としては転折を表す「然」一字が用いられているに過ぎない。これに対応する『六一詩話』の「國朝浮圖、以詩名於世者九人、故時有集號九僧詩、今不復傳矣」では、限定を表す「以」「於」、因果関係を表す連詞「故」、断定を表す「矣」を連続して用い、読み手の筋の把握を容易にしている。しかも、新たに付け加えられた文章中に「是可歎也」と感情を表す語句を配置し、文章を深化させ立体的な展開にしている。

「三上」、「三多」の逸話で知られるように、歐陽脩は初稿に再三推敲を施し、修正・改訂を加えて、文章を練り上げ完成させるのが得意であった。もちろん、他の作者も推敲に力を入れるであろうが、歐陽脩はとりわけ徹底していたのである。南宋の周必大（1126～1204）は「歐陽文忠公集後序」の中で、「前輩嘗言。公作文掲之壁間、朝夕改定。今観手寫秋聲賦、凡数本」と記述するように、歐陽脩は作品を完成させた後、壁にその作品を掲げて何度も修改を加えていた。従って、「秋聲賦」という作品は、幾つかのバージョン、つまり初稿から決定稿に至るまでの数種類の作品が存在することとなった。いつも目に入る場所に自分の作品を掲げていることは、歐陽脩が日常生活で常に文章のことを考えていることを物語っており、このようにして文章を徹底して練り上げていくことが、彼の古文作成スタイルなのであった。

『試筆』から『六一詩話』へとまとめられていく過程でも、おそらくこうした作成スタイルを取って、次第に内容が深化し、それとともに文章も精錬されていったのだと言えよう。しかも、『六一詩話』へとまとめられていく過程で、虚詞がその文章に効果的に添加されていたのであった。

## 五　おわりに

これまで『六一詩話』の文体についての具体的考察は少なく、とりわけ虚詞の使用に視点を据えて、その文体を総合的に考察した先行研究は全くなかった。

本稿で『六一詩話』に用いられている虚詞に着目すると、『歸田録』と同一の文体的特色を持つことが明らかとなり、これは『六一詩話』が『歸田録』から枝分かれした作品という従来の説を大いに裏付けるものとなる。中国文学史において歐陽脩によって創出された詩話というジャンルが、実は『歸田録』の改訂過程から生まれたということは興味深い。いわば、副産物として文学史に生み出された詩話というジャンルが、後世「詩話興って詩滅ぶ」と揶揄される程宋代で盛行をみるとは、歐陽脩も予想さえしなかったことであ

ろう。

更に『六一詩話』と『續詩話』を比較すると、『六一詩話』の方に虚詞がより多く使用され、その中でも＜非明示型＞の虚詞が多用される傾向のあることがわかった。比較の対象とした『續詩話』における虚詞の使用傾向は、今後『續詩話』の作者司馬光の文体を考える上で、一つの手がかりになると思われる。[17] また『六一詩話』の編纂過程において、虚詞が添加される傾向のあることは、歐陽脩の文章作成過程の一端が窺えて非常に興味深い。

本稿は、『六一詩話』の虚詞の使用に視点を据えることによって、これまでとは全く異なった視点から歐陽脩の文体の特色を照射したが、このように古文の文体を考察する際に、虚詞の使用に視点を据えることは、極めて有効な方法なのである。

## 注

（1）洪本健「略論歐陽脩散文的陰柔之美」(『華東師範大学学報（哲学社会科学版)』1985－4、1985年)

（2）楊慶存「宋代散文体裁様式的開拓与創新」(『中国社会科学』1995－6、1995年)

（3）拙稿「歐陽脩の『歸田録』について」(『九州中国学会報』第34巻、1996年)参照。

（4）李偉国「歸田録佚文初探」(『澠水燕談録　歸田録』中華書局、1981年、所収)

（5）豊福健二「「六一詩話」の成立」(『小尾博士古稀記念中国学論集』、1983年)

（6）興膳宏「宋代詩話における歐陽脩『六一詩話』の意義」(『日本中国学会創立五十年記念論文集』、1998年)

（7）劉徳清『歐陽脩論稿』(北京師範大学出版社、1991年）273～274頁の記述。

（8）呉孟復『唐宋古文八家概述』(安徽教育出版社、1985年）83頁の記述。

（9）本稿における虚詞の意味やその働きについては、主として牛島徳次『漢語文法論（中古編)』(大修館書店、1971年）に基づいた。

(10)『統計学辞典』(東洋経済新報社、1989年）にスピアマンの順位相関係数について、「順位からつくったピアソンの相関係数

$$\rho = \frac{12}{n(n^2-1)}\sum_{i=1}^{n}\left(R_i - \frac{n+1}{2}\right)\left(Q_i - \frac{n+1}{2}\right) = 1 - \frac{6}{n(n^2-1)}\sum_{i=1}^{n}(R_i - Q_i)^2$$

をスピアマンの順位相関係数(Spearman's rank correlation coefficient またはスピアマンのρ）という（C.Spearman［1944a］)」とある。スピア

マンの順位相関係数、ピアソンの相関係数は、いずれも全く同一ならば＋１、全く正反対ならば－１となる。従って、＋１に近い程、関係が近いということになる。なお、ここではスピアマンの順位相関係数は同順位修正版を用いた。これらについては鹿児島大学理学部の近藤正男教授（統計学）にご教示いただいた。

(11) 注（５）豊福氏論文参照。

(12) 清・何文煥『歴代詩話』(中華書局、1981年）には、『續詩話』として31条の記事が収録されているが、最後の３条は『春明退朝録』と『詩話総亀』の記事が誤って挿入されたものである。詳しくは許山秀樹・松尾肇子・三野豊治・矢田博士「『温公續詩話』訳注稿」(愛知大学語学教育研究室『言語と文化』第９号、2003年）参照。

(13) 注（６）興膳氏論文参照。

(14) 高橋明郎「歐陽脩の散文文体の特色―韓愈の散文との差の成因―」(『日本中国学会報』第38集、1986年)。

(15) 注（14）高橋氏論文参照。

(16) この蘇軾の記述は『歐陽文忠公集』巻130末尾に掲載されている。

(17) 司馬光の文章を考える際には、彼が『資治通鑑』を著した歴史家であったという側面は無視できない。司馬光が歐陽脩に比べて虚詞の使用が少ないのは、歴史的事実を書きつづる際に虚詞の使用を省き、簡潔に務めようとした彼の姿勢があったのかもしれない。そうした姿勢が他の文章（たとえば『續詩話』）に表れたとも考えられるが、これについては今後の検討課題としたい。

※本稿は、2005年９月に開催された「中国宋代文学学会第四届年会暨宋代文学国際学術研討会」(中国杭州・浙江工業大学）での発表原稿に基づいて作成したものである。

[補記]

本稿は、平成17年度科学研究費補助金・其盤研究（Ｃ）「唐宋古文の実用面に関する文体論的研究」による研究成果の一部である。